

協

働

による授業づくりで

目指したいもの

協働による授業づくりを通して、「目の前の子供を大切にした授業」を更に充実させ、子供たちの「できた!」「楽しかった!」の声や笑顔で満たされる教室を目指しましょう!

本リーフレットは、協働による授業づくりのポイントや留意点を、「構想編」と「実践編」の2つの視点で捉えて作成しました。自校の実態を踏まえ、日々の授業改善、協働による授業づくりの推進に活用ください。

資料『5つの提言』再確認

■ 協働による授業づくり「構想編」

■ 協働による授業づくり「実践編」

## 提言 1

どの子供にも積極的に声掛けをするとともに、子供の声に耳を傾けること。

→どの子供にも一日一回は声を掛け、子供の話をじっくり聞くことが、心のケアや人間関係づくりにつながります。

## 提言 2

子供をほめること、認めること。

→子供は、ほめられると集中力が高まります。授業中にほめたり認めたりすることは、学習評価のひとつです。

自己肯定感と自己有用感を育み、学習への集中力を高めます。

提言 1・2  
Point

- 学校生活のあらゆる場面で継続すること
- 発達の段階を踏まえ、その子供に適した声の掛け方、ほめ方を実践すること
- 教員で情報交換しながら、その子供のよさを見逃さずにほめ、認めること
- 自分の気持ちや考えを声や行動に表すのが苦手な子供がいることを理解しておくこと
- 全ての子供たちに声を掛け、言葉に耳を傾けること

## 提言 3

授業のねらいを明確にするとともに、授業の終末に適用問題や小テスト、授業感想を書く時間を位置付けること。

→本時のねらいをより具体的に設定し、1単位時間で育てる力を明確にします。授業の終末には、子供の学びを的確に把握し後の指導に生かすようにしましょう。

## 提言 4

自分の考えをノートにしっかり書かせること。

→黒板を書き写すだけでなく、自分の考えをノートに書くように指導します。書くことは、思考力、表現力を育てます。ワークシートではなく、ノートづくりを徹底しましょう。

「授業の基礎・基本の一つ」として、どの授業でも必ず行います。

提言 3・4  
Point

- 終結まで確実に終える授業を継続すること
- ねらい提示と振り返りを継続し、単位時間のねらいとまとめを一体として理解させること  
 （例えば、2時間扱いでねらいを達成する授業では、それぞれの時間のねらいとまとめを明確にし、2時間で最終的なねらいを達成できたことを実感させること）
- 自分で考えたりまとめたりできるように、時間と手間を掛けてノートの使い方を指導すること

## 提言 5

家庭学習の時間を確保すること。

→学校で学んだことを家庭で復習することは、知識や技能の定着につながります。予習は、授業での理解を早めます。各学校で作成している「家庭学習の手引き」の中に、家庭学習のメニューを具体的に記載するとともに、適度な量の宿題を課しながら家庭学習を習慣付けましょう。また、保護者には、子供に声を掛けたり子供を認めたりすることが家庭学習への意欲付けになることを伝えましょう。

提言 5  
Point

学習内容の確実な定着を目指します。

- 授業との連動を図ること
- 家庭学習の「質」の向上を図るためにも、「提言 3、4」の実践が前提となること

自校化  
系統性

- 各学校課題に対して、特に重点を置く提言を決めること
- 重点を置く提言について、保護者に説明し、理解と協力を得ること（特に提言 5）
- 各学校の課題を踏まえ、実践したことに対する評価を大切にすること（PDCAサイクルの確立）
- 小学校の6年間、中学校の3年間、「同じ約束事で実践すること」と、「学年の発達の段階に応じて変えながら実践すること」の共通理解を図ること（子供たちにとって切れ目のないものに）

## Q1 目的は？

A1

- 一人一人の教員が「子供の学校生活の中心は授業である」という原点に立ち戻ること
- 学校が組織として「子供の声を聴き・ほめ・認める授業づくり」と「互いに認め合う学級づくり」のために校内での**日常的な学び合いによる教員の指導力向上を図ること**（宮城県教育委員会）

## Q2 具体的な流れは？

A2

まず、授業者がどの時間の指導について提案するかを選び、その授業のねらいをおさえ、大まかな指導のイメージを膨らませます。その後、それを軸に具体的な指導についてチームで検討します。検討により、指導の流れがより明確になったところで、指導案作成に入ります。作成後は、指導の具体が明確になるような検討を通し（模擬授業や事前授業は有効な手立てです）、研究授業から事後検討会へとつなぎます。

この流れをそれぞれの学校における検証改善（PDCA）として位置付け、よりよい実践へとつなぐことを目指します。

### \*気を付けたいこと

初めから「仕上げた指導案」を検討し、チームで修正を加えるやり方では、授業者のよりよい授業づくりへの意欲が育ちません。「チームで授業の骨子となるイメージを膨らませる過程」を共有し、授業者が課題意識を持って改善に努めることが何より大切です。

## Q3 「協働」のメリットは？

A3

担当する学年が異なる立場から、あるいは、指導する教科が異なる立場から感じたり気付いたりした意見は、授業者の新たな気付きを促します。そのことが、多様な児童生徒の考え方や反応を予想することにつながり、指導者の**授業構想力**が育ちます。また、それが実際の指導場面での対応力や修正力につながります。

さらに、指導の系統性について考えることにもなり、指導観の深まりが期待できます。

児童生徒の実態把握を基に、予想される反応を多様に多面的に洗いだすことで、一人一人の表情の変化やつぶやき、発言等を生かした授業を構想することができます。授業中の児童生徒の反応に対応し、必要に応じて、発問や時間配分等、授業の流れを修正しながら進めていくことが大切です。

## Q4 授業づくりの流れは？

A4

「3つのStep」を踏まえ、児童生徒目線での協議を大切にしながら授業をつくっていきます。

- Step1 目の前の児童生徒に対する**単元全体で身に付けさせる力を明確にする**。
- Step2 **児童生徒の実態把握**を適切に行う。
- Step3 単位時間毎の指導の**ねらいを明確に**する。**手立てを具体化**する。

## Step 1

### 単元全体で身に付けさせる力の明確化

－ 単元（題材）について分析しましょう！ －

#### ゴール（ねらい）は何か

- ➔ 単元全体で身に付けさせたい資質・能力を確認します。

#### ゴールまでどのようなステップを踏ませるか （バックワードデザインによる計画）

- ➔ ゴールを達成するために「時数はどの程度あるか（必要か）」、「1時間1時間をどう作っていくか」を検討します。一つ一つの活動につながりを持たせ、1時間1時間の授業に、ゴールに向けてどんな目的があるかを位置付けます。

確認

単元（全体）で身に付けさせる力を基に、1単位時間（部分）を構想し、「単元観」を具体化しましょう。「次の時間までに必要なことは何か」、「何を家庭学習とするか（授業との連動）」などを明確にしたいところです。

## Step 2

### 児童生徒の適切な実態把握

－ 児童生徒観を明確にしましょう！ －

#### 何が十分で、何が不十分かの把握

- ➔ 必要とされる既習について、一人一人の定着の状況を把握します。
- ➔ 学習集団としてどのような傾向か把握します。

#### 指導する上で、どのような配慮が必要かの検討

- ➔ 定着が十分な層と不十分な層の、それぞれに応じた手立てを考えましょう。

確認

単元で身に付けさせたい力の「現状」や児童生徒の「よさと課題」を見取り、「児童生徒観」を具体化しましょう。可能な範囲での数値化を図りましょう。

## Step 3

### 指導の手立ての具体化

－ 「この内容」を「この子供たち」にどう指導するか具体化しましょう！ －

#### 児童生徒目線で

- ➔ 目の前の子供の「よさを生かす」、「課題を克服する」観点で検討します。
- ➔ 児童生徒の具体的な「言葉」や「行動」を位置付けます。

#### 単元全体を通して

- ➔ 1時間毎の評価の焦点化を図ります（単元全体でバランスを踏まえた計画）。
- ➔ 1時間毎の定着の個人差を適切に見取りつつ、単元全体を通して身に付くよう計画的に指導します。

#### 「本時」をつくる際に検討したいこと

子供たちに「分かった」「できた」と実感させたい瞬間を「山場」とし、そこに向けどう展開するか、発問していく必要があるかなどを逆算してつくります。

個の考えを基に集団で考えを共有し、それらを踏まえ、個に戻って考えさせる学習過程

個人差への指導・支援（発展と補充の両面）

予想される児童生徒の反応を想定し、発問を吟味しましょう。授業者は、学習集団の雰囲気や想定しながら1時間の流れをイメージしましょう。実際に事前授業や模擬授業を行うことも有効です。

確認

- 導入では、特に「どの子供も置いていかないこと」を意識したいところです。  
\* 定着が不十分な子供の立場で、発問を吟味する。  
\* 「分かったつもり」でいる児童生徒の思考を揺さぶる。
- 丁寧に説明しすぎず、児童生徒が主体的に思考する時間を保障しましょう。  
\* 特に、終末では「もっとできるようになりたい」という児童生徒の意欲をそがないよう、時に「手放すこと」も…。

## Q1 授業の「見方」で大切にしたいことは？

A1

児童生徒の表情やつぶやき、発言等から、**授業のねらいに迫っているかどうか**を見取ります。

特定の指導方法にしばられず、本時のねらい達成につながる児童生徒一人一人の表情の変化やつぶやき、発言等を取り上げ、それを生かした授業を展開したいものです。また、学習形態や個別の支援等を工夫することで、児童生徒一人一人の学びの実感に結び付けていきましょう。

### 職員間での役割を分担する

以下のア～ウに留意しながら、職員間で役割分担をしながら研究授業を見ましょう。

- ア 全体の流れとしてどうか（時間配分を含めて）
- イ 定着の不十分だった児童生徒の学びはどうか（どこでつまづいたか・何が難しかったか）
- ウ 定着が十分な児童生徒の学びはどうか（発展的な学びを保障できたか）

### 授業記録を取る

上記ア～ウを踏まえ、授業記録を取り、事後検討会につなげます。

## Q2 事後検討会で大切にしたいことは？

A2

本時のねらいが達成されたか、授業記録を基に検討します。成果と課題は次の実践に生かしましょう。

### 成果の日常化に向けた視点

事後検討会では、「日常の授業に取り入れるための視点」を大切にしましょう。また、話し合った改善策については、期間を決めて実践し、その効果を確認するための検討もしましょう。

### 教科等を横断する「スタンダード化」の検討

授業者のスキルや児童生徒の実態のよさを取り上げつつも、どの学級（教科）でも共有できることは実践につなげましょう。

## Q3 協働による授業づくりの継続のためには？

A3

校内での研究授業を核として、協働による授業づくりを進めます。チーム構成や事前・事後検討会の持ち方を工夫するなど、児童生徒の実態やそれぞれの職員の持ち味を踏まえ、自校化を図りましょう。その際には、教科や担当学年の違い、教職経験の差を生かしながら無理のない実践を進めましょう。

### 授業の「見方」・「生かし方」を共有

校内で授業の「見方」をそろえ、授業の「何を」、「どのように」改善すればよいのかを共有することで、教職員全体で「授業観」の形成を目指しましょう。

**\* 授業の「見方」・「生かし方」の具体的なポイント**

Point

1

## チームで見る

### 検証に向けて

- ➔ 「教師を通して」「子供を通して」の2つのベクトルで授業を見ます。
- ➔ 「学級全体を見る」「特定の児童やグループを取り出して見る」等、検証の目的に応じた役割分担をして授業を見ます。

### 授業記録

- ➔ 成果は「児童生徒の表情やつぶやき、発言等の変容」で見取ります。「見取り方」を職員間で共有します。

### 「学習意欲」の見取り例

- 子供たちから問いを引き出しているか？  
(実態や思いに沿う展開、学習の意味を理解)
- 子供たちが見通しを持って探究しているか？

#### 確認

「なぜ、それを学ぶのか」、「どんな力を身に付けさせるか」を明確にすることで、学習成果につながる活動に取り組みせましょう。

### 「学び合い」の見取り例

- 相手や目的を理解して行っているか？
- 考えのよさや本質について話し合っているか？
- 自分の考えを確かめたり広げたりしているか？

#### 確認

- 他者との対話（他者の考えとのつながり）と、自己との対話（自分の考えの再構築）のよさや達成感を味わわせましょう。
- 子供たちの声（表情やつぶやき、発言等）を受け止め、つなぎ（子供と子供、子供と教材）、もどして（教材に、ずれを、学びを個別に）いきましょう。

### 「学びの実感」の見取り例

- 「何ができるようになって、何ができているか」等を自分の言葉でまとめているか？
- 新しい問いを見いだすことができているか？

Point

2

## 日常化を目指した事後検討会

### 全員参加の事後検討会

- ➔ 授業記録を基に成果や課題の根拠や理由を明確にします。

### 成果の実践・検証

- ➔ 成果の日常化が図られているか定期的に職員で確認し合いましょう。必要に応じて、評価シート（教師用／児童生徒用）の作成、活用を通しての授業改善も効果的です。

### 共有・発信

- ➔ 研究便り等を作成し、事後検討会の成果を整理し、共有します。（教職員・保護者向け、中学校区での共有）

#### 確認

- 「視点」はあくまで手段・方法です。「方法論」に偏りすぎると、ねらいが置いていかれる検討になる場合も…。
- 全員が自分の考えを「持つ」、「言える」場の設定の中で、批判や指摘に終始せず、代案を提示したり、改善策を検討したりしましょう。